

3 出入り口をもつ建物について

今回報告する F・G 地区をはじめ、H・K・Q・R 地区も含めた南北盛土間では、多数の建物・柱穴群を検出した。これらの建物は様々な規模のものが存在するが、出入り口と思われる柱穴をもつ建物が、一定数存在する。建物に伴う出入り口と推定したものは、0.5～1.0m 程度の間隔を持つ 2 基 1 対の柱穴で、長さ 0.3～1.0m の細長いものが多い。これらの出入り口は円形にめぐる壁柱穴や四本柱の主柱穴と組合わさり、建物（以下、出入り口付き住居）を構成する。こうした出入り口付き住居は縄文時代中期末～晩期にかけて、北海道から中部・関東地方に及ぶ東日本全域に分布する。ここでは岩手県、秋田県以北の北日本の事例を集成し、時期毎の分布を示す。

出入り口付き住居の出現は中期末葉にさかのぼる。出入り口付き住居は関東・中部地方では中期末に出現する柄鏡形住居や敷石住居からの系譜が考えられているが（菅谷 1995）、北海道を含めた北日本の事例の中で、柄鏡形住居、敷石住居との系譜を確認できる事例は存在せず、中期末に位置づけられる丹後谷地遺跡の第 35、42 号竪穴住居跡がもっとも古い事例である。

一方、出入り口付き住居の終末ははっきりとはわからないが、今回の集成では晩期中葉の大洞 C 1 式に位置づけられる右エ門次郎窪遺跡の第 3 竪穴住居跡が、もっとも新しい事例である。関東地方などでもこの時期以後住居跡の検出例が減少し、出入り口付き住居を確認できなくなることから、出入り口付き住居の終末時期はおおよそ晩期中葉と考えてよいと思う。

表 51 に北日本の出入り口付き住居の一覧表を示した。検出数は後期前葉から後葉にかけて増加し、晩期に入り急激に減少する。特に後期後葉に爆発的に増加しているのがわかる。一方、出入り口付

表 51 出入り口付き住居検出遺跡一覧

遺跡名	所在地	中期末	後期前葉	後期中葉	後期後葉	晩期
船泊遺跡	北海道礼文町				2	
ユカンボシ E8 遺跡	北海道恵庭市			1		
ユカンボシ E3 遺跡	北海道恵庭市			6		
西島松 15 遺跡	北海道恵庭市			1		
柏木川 11 遺跡	北海道恵庭市			2		
キウス 4 遺跡	北海道千歳市					
梅川 3 遺跡	北海道千歳市			1		
浜松 5 遺跡	北海道八雲町		3			
釜谷 2 遺跡	北海道南茅部町				10	
新道 4 遺跡	北海道木古内町		1		2	
尻高(4) 遺跡	青森県平舘村				4	
大石平遺跡	青森県六ヶ所村		2			
上尾駸(2) 遺跡	青森県六ヶ所村		2			
神明町遺跡	青森県金木町			1		
砂沢遺跡	青森県弘前市				1	
十腰内(1) 遺跡	青森県弘前市					1
丹後平遺跡	青森県八戸市		1	3		
田面木平遺跡	青森県八戸市		4			
鶉窪遺跡	青森県八戸市		1			
風張(1) 遺跡	青森県八戸市				14	
丹後谷地遺跡	青森県八戸市	2	3	9	3	
右エ門次郎窪遺跡	青森県南郷村					1
吠屋敷 I a 遺跡	岩手県軽米町					1
大日向 II 遺跡	岩手県軽米町				5	
馬場野 II 遺跡	岩手県軽米町					
大湯環状列石	秋田県鹿角市		1			
検出数合計		2	18	24	41	3
遺跡数合計		1	8	8	9	3

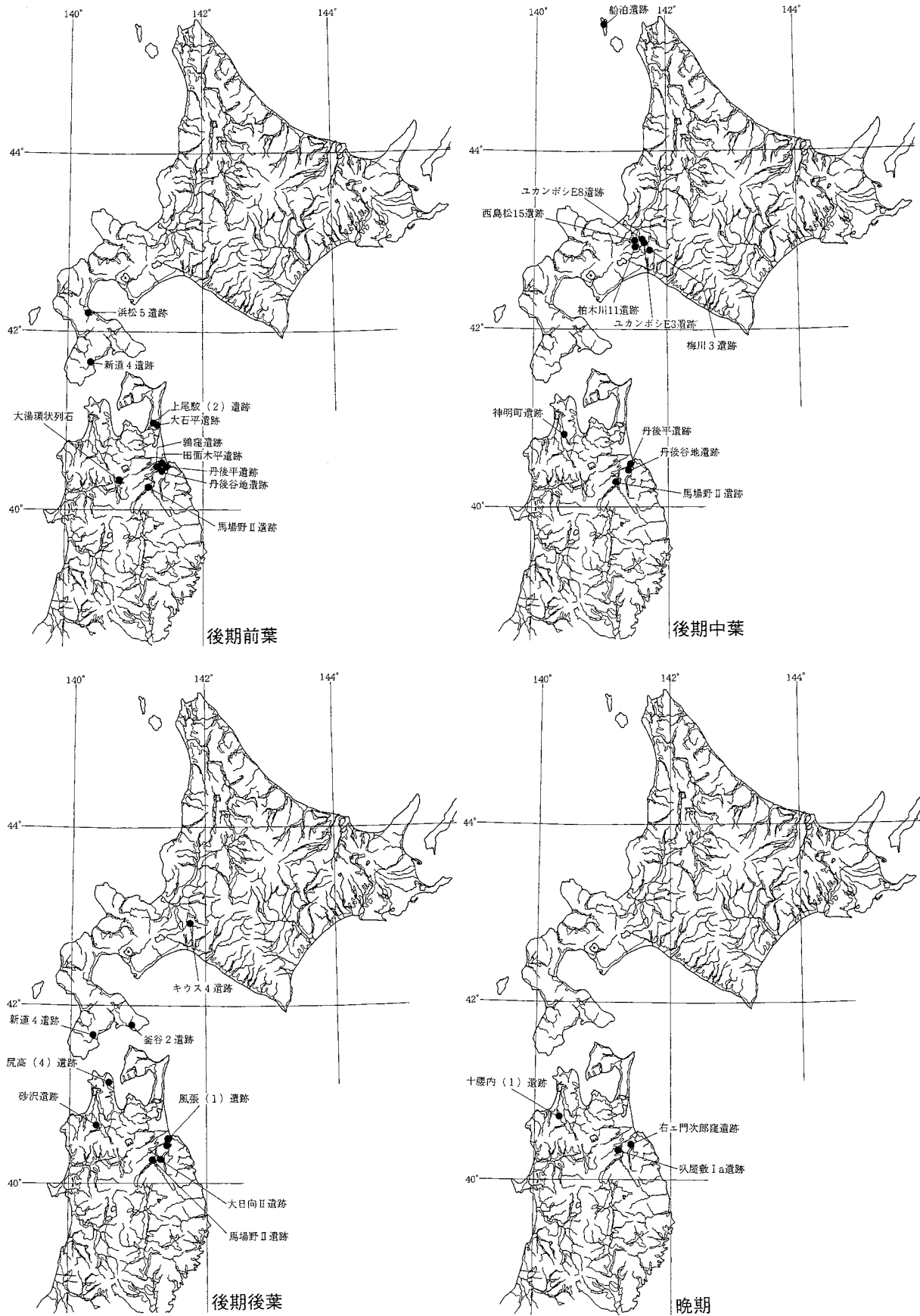


図292 出入り口付き住居時期別分布図

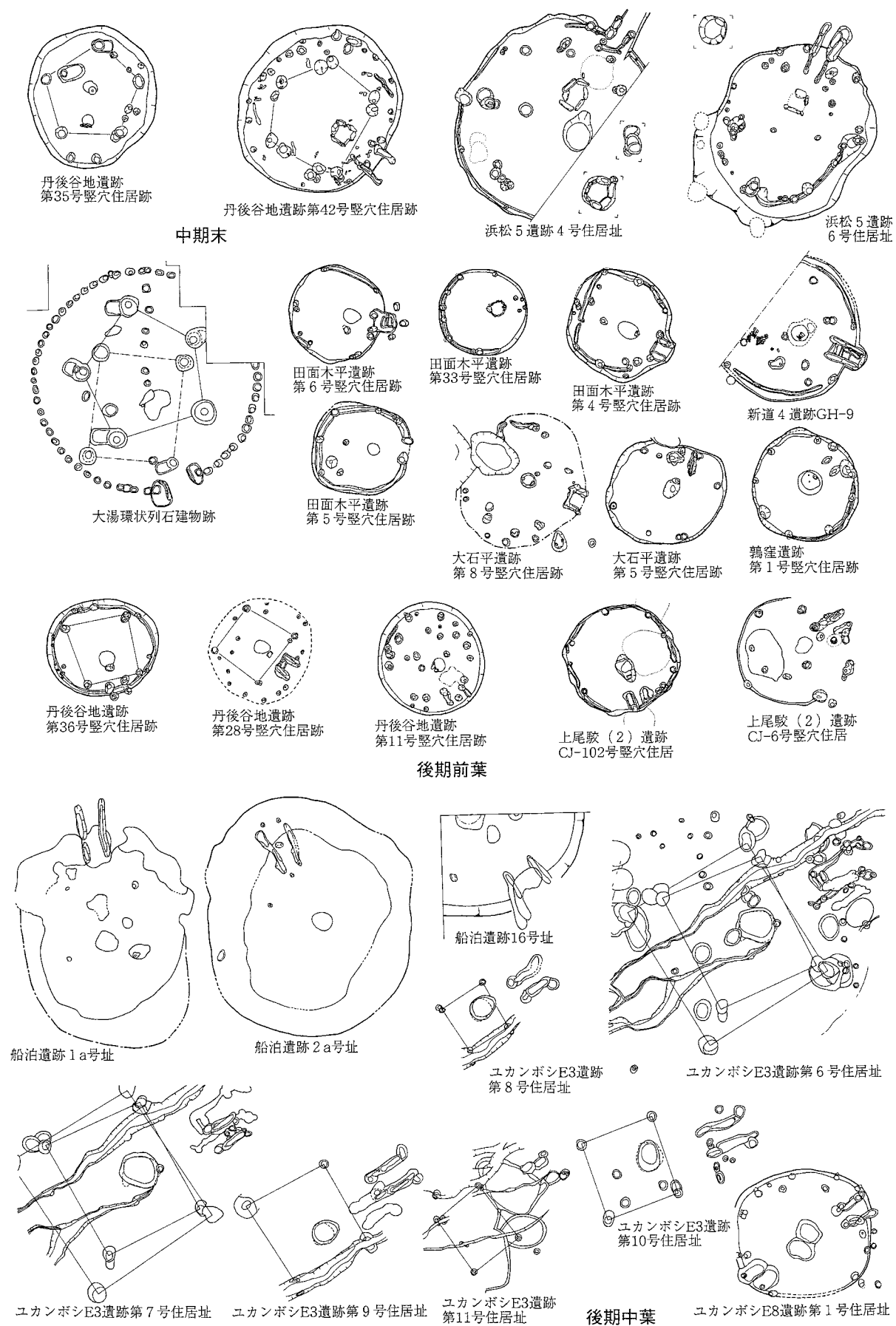


図293 出入り口付き住居 (1)

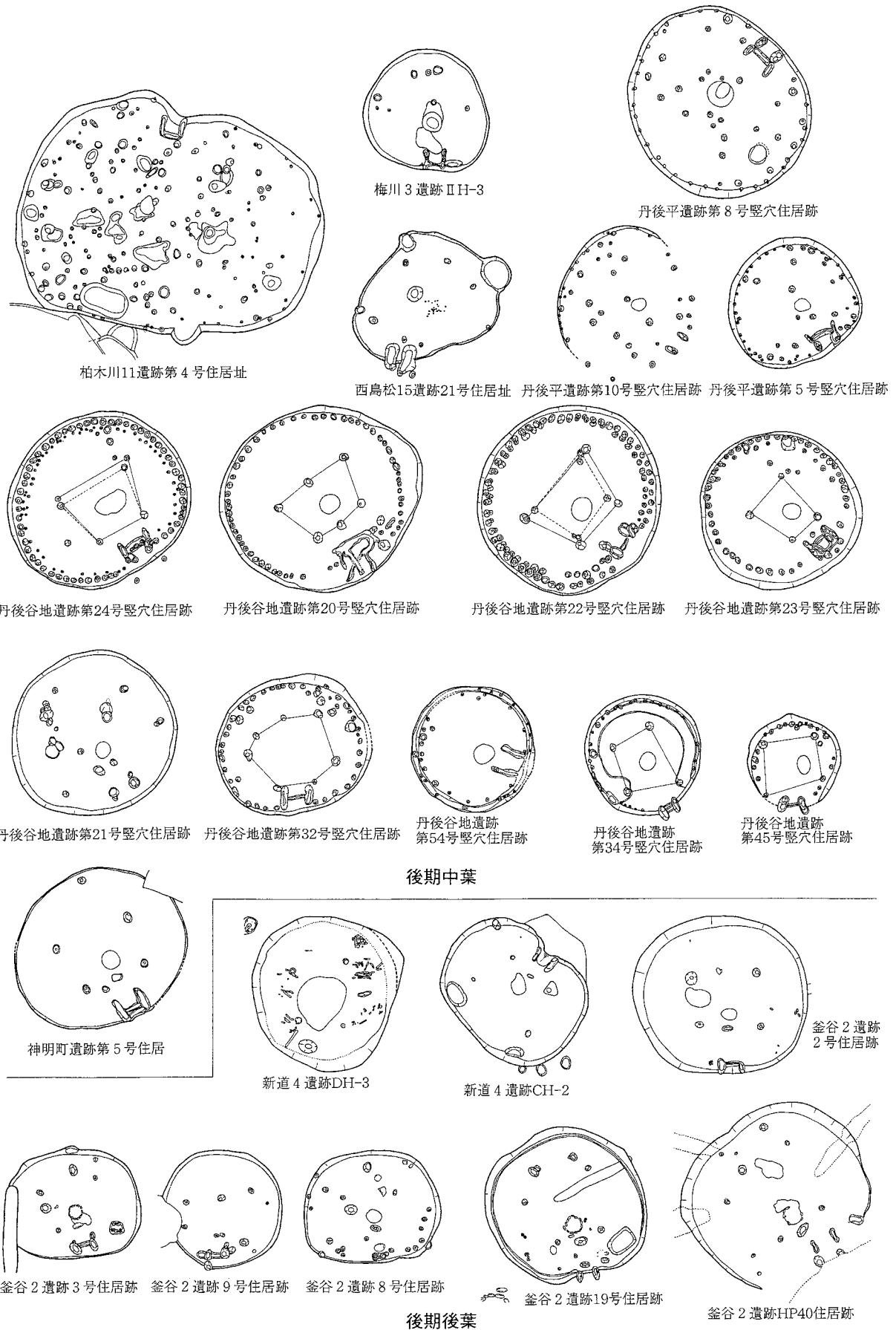


図294 出入り口付き住居（2）

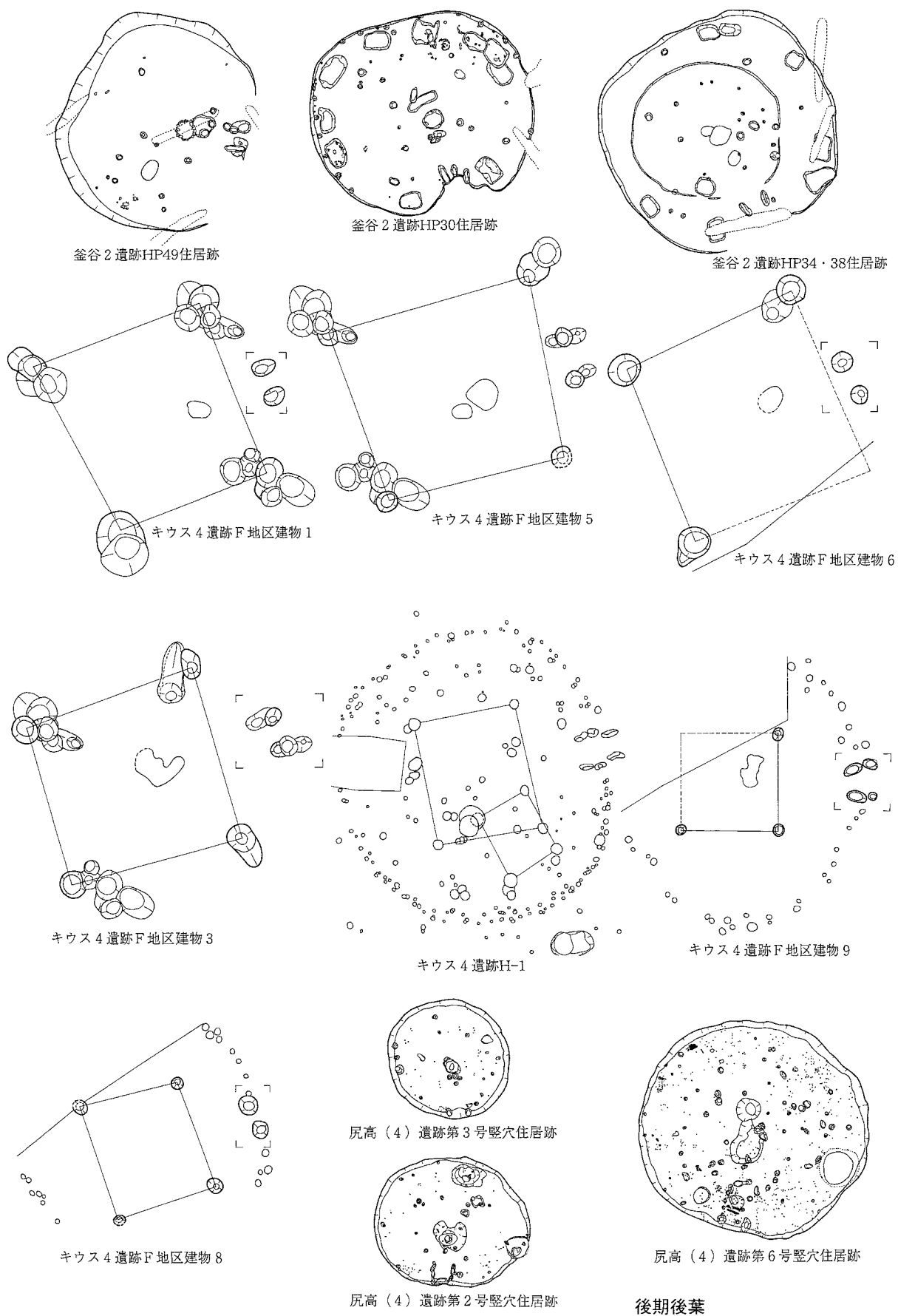


図295 出入り口付き住居 (3)

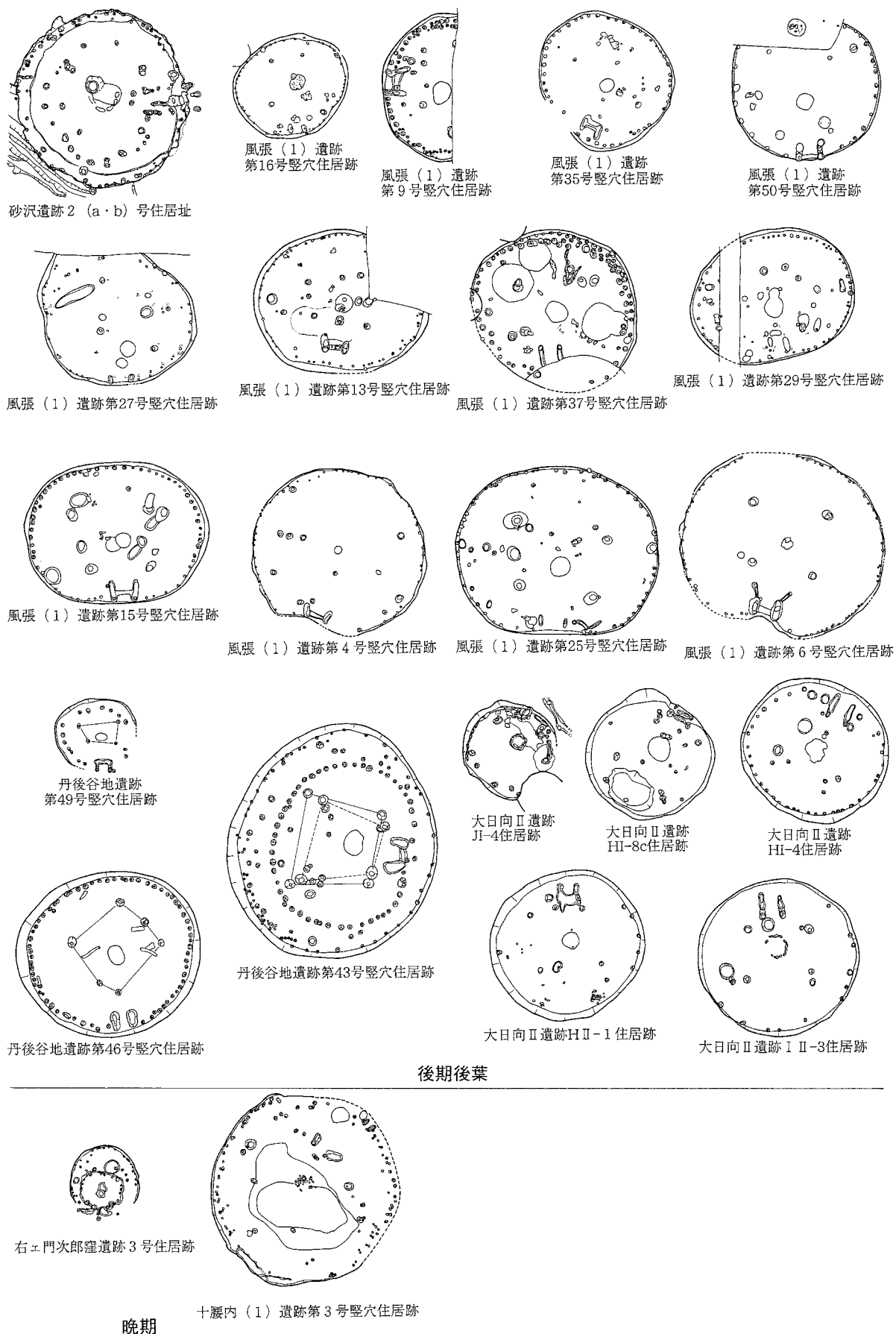


図296 出入り口付き住居(4)

き住居を検出した遺跡数をみると、中期末と晩期初頭が少ないのは遺構数の場合と変わらないが、後期前葉から後葉にかけて、遺跡数に大きな変化はないことがわかる。これは後期後葉にはキウス4遺跡や風張遺跡などの、出入り口付き住居が多数検出された、大規模な集落遺跡が出現することが原因と考える。

出入り口付き住居の分布を、後期前葉から晩期にかけて時期別にみると（図292）後期前葉は馬淵川流域にあたる岩手県と青森県の県境、小川原湖周辺、道南に分布する。ほぼ全て太平洋側に分布しており、日本海側に位置する大湯環状列石は、今回集めた事例の中で唯一秋田県の遺跡である。中期末葉には馬淵川下流の丹後谷地遺跡でしか確認されていなかった出入り口付き住居が、道央以北を除いた北日本全域に分布するようになる。

後期中葉になると出入り口付き住居の分布は道央から、道北の礼文島まで広がる。北海道では特に千歳市、恵庭市を中心とした道央部の石狩低地帯に集中する。逆に道南ではこの時期の出入り口付き住居は検出されていない。次の後期後葉には道南にも出入り口付き住居が存在する事から、この時期に道南で出入り口付き住居が無くなるのではなく、未だ発見されていないものと理解したい。

後期後葉の出入り口付き住居は、道央ではキウス4遺跡のみとなり、道南では2遺跡で確認できる。先述したとおり、この時期はキウス4遺跡や風張遺跡などのように、出入り口付き住居が多数検出された遺跡が現れるため、検出数の増加と比較し、遺跡数は必ずしも増えていない。また、道央での出入り口付き住居の検出はキウス4遺跡のみとなるが、キウス4遺跡から南へ10数kmのところにある美沢川流域の遺跡では、美々4遺跡を中心にP字形ピットとして報告された柱穴状の土壌や、盛土遺構、周堤墓などが検出されており、キウス4遺跡と似た遺跡構造が確認できる。これらのことから、美沢川流域の遺跡にも出入り口付き住居が存在した可能性がある。

晩期では遺跡数が急激に減少し、北海道ではこの時期の出入り口付き住居は検出されていない。この時期をもって北日本の出入り口付き住居はなくなるものと考えられる。この時期以降、擦文時代まで、北海道では住居跡の検出数そのものが減少し、当時の社会システムそのものが大きな変革を遂げたのではないかと推測する。

以上、出入り口住居の分布を時代毎に概観した。出入り口付き住居の分布は、凡時代的に馬淵川流域、小川原湖周辺、石狩低地帯に集中する。馬淵川流域は特に遺跡数が多く、この地域が北日本の縄文社会における一つの拠点として機能していたものと推測する。日本海側では大湯環状列石で1例確認した以外は、東北地方、北海道ともに確認できない。後期の遺跡そのものは、北海道、東北地方の日本海側でも少なからず確認されていることから、出入り口付き住居は太平洋側を中心に分布していたと考えられる。また、太平洋側でも道南と道央の間に当たる内浦湾沿岸では、出入り口付き住居が検出されていない。内浦湾沿岸では、後期の遺跡そのものが少ないことから、キウス4遺跡をはじめとする道央部で検出されている出入り口付き住居は、道南を経ずに、馬淵川流域や小川原湖周辺の遺跡との交流を通して受容された可能性が高い。縄文時代後期には隣接地域相互の直接的な交流よりも、各地に存在する拠点的な集落を媒介とする、複雑なネットワークが機能していたのではないかと推測する。キウス4遺跡は、道南地域との直接的な交流よりも、馬淵川流域、小川原湖周辺の遺跡を媒介とする交流の中で、道央部の拠点集落としての位置づけを高めていったものと考えられる。また、このような、拠点集落を媒介として遠隔地を結ぶネットワークは、翡翠や赤彩土器などの威信材の流通とも関わるものと考えられる。（石井淳平）